

参勤交代ならぬ山勤交代 お待たせしました！ いよいよ田舎の出番です

智頭町長 寺谷誠一郎さん



1943年智頭町生まれ。成城大学経済学部卒業。72年旭光南社長。97年智頭町長就任。2期目の2004年に、合併の是非を問う住民投票で賛成票が上回ったことを受け辞職。その後、2008年の町長選で再選。再選後、町内67全集落をまわり、「要求型から提案型」の住民参画を訴えた。

構成・文責＝編集部
写真＝森のようちえん＋編集部

地方創生はある意味で戦国時代です。隣同士の町が勝つか負けるか。昔の戦国時代は鎧や鉄砲で領土の奪い合いをしましたが、今の武器は知恵しかない。どういう知恵を出すかによって、名もない町でもトップランナーになれるチャンスが到来したとも言えます。非常に怖い面もあるけど、ものすごく夢のある面もある。両極端で、真ん中にはありません。

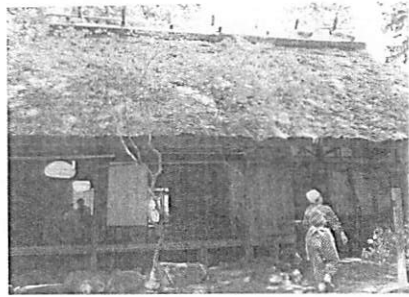
地方創生で人間再生

日本の国土の67、8%は山。これから地方創生の知恵を出し合うことになる。大半が山からの発想。地方がいつせいに弾を出すと、同じような弾ばかりになるでしょう。だからよほどの弾を出さないと。しかし智頭町は93%が山なので、やはり山からの発想しかありません。

江戸時代の参勤交代は、地方の大名に力を持たせると、いつ江戸に攻めつけるかわからないので地方の力を削ぐために江戸に呼んだ。現代は東京から地方の山に人を呼び込む「山勤交代」でなければならぬと思います。なぜか。今の東京の30、50代は精神的なストレスで苦しんでいます。3世代くらいさかかると、血はほとんど田舎につながっています。かつては東京に引張り出してきた人を、これからは田舎に呼び込もうという山勤交代です。

東京などの大都市、そして大企業では、昨日まで元気だったけれど、今日はどうつになつて会社に行けなくなる人がたいへん多いそうです。病気になる社員に会社は「辞める」とは言えない。給料を減らしても面倒をみなきゃいけない。いっぽうで休んでいる人のかわりを新たに雇わなきゃいけない。病気の社員が100人もいたら、別に100人雇わなきゃならない。こんなことでは将来会社がも

町長が27歳のとき、古民家を山の中に移築して開いた「みたき園」。山菜会席が人気で、「山のもの、密閉されたビルの中で食べてもおいしくない。春夏秋冬の風や光や水の音を感じてほしいから、すき間だらけのあばら家です」と町長。現在は夫人が経営



たない。企業がこれから一番怖いのは、自殺とかうつとか躁などの、社員のメンタルヘルスの問題だ——そんな話を、4、5年前に東京で聞き、智頭町では「森林セラピー」に取り組み始めました。山に入って、緑に囲まれて深呼吸すると気持ちいいというのはみんな知っている。ところが大手の企業に行くと、森林セラピーに本当に科学的な効果があるのかと聞かれると、だれもやっていない。そこで2年前に、千葉大学環境健康フィールド科学センターと共同で、森林セラピー効果のデータ測定を行いました。東京、大阪から50人のモニターに来てもらい、小さいコンピュータをからだに貼りつけて、セラピー実施前、実施中、実施後の心拍数や血圧などを測定するのです。またセラピー

のゆっくりのんびりの安定感が、東京や大阪に帰っても1週間くらい持続するというのもわかりました。その臨床実験の結果を、千葉大学教授の宮崎良文さんが、ハーバード大学の森林医学シンポジウムで報告したのです。森林セラピーは躁やうつ予防とい

った、メンタルヘルス面に非常によいところ。この結果をふまえて、つぎにやろうとしているのは森林を活用した法人向けメンタルヘルスプログラムの開発です。これはあくまで構想ですが、たとえば東京の大手企業が、社員に「鳥取県の智頭町」というところに、1週間、10日、1カ月の森林セラピーのコースがあるから、リフレッシュしてこないか」とすすめます。社員はパソコン1台持ってきて智頭の民家に泊まる。民家は食事代と宿泊代として、たとえば1カ月で1人10万円いだけ。最大3000人を1カ月引き受けたら3000万円。それが12カ月なら3億6000万円。

社員は山に生きてきた先祖のDNAをもう一回洗い直してリフレッシュする。企業も喜ぶ。メンタルヘルス上の問題で1人リタイアすると800万から900万円はかかる。病気になるなかつたら「10万、20万円は安い」と言っんです。それを会社は福利厚生でできる。智頭町も潤う。企業誘致で会社に来てもらうのではなく、人に来てもらうのです。東京に一極集中させてきたのは国の政策でもあったのだから、国もまた自分の負担をすべきです。

また智頭町が1カ月3000人、12カ月で36000人受け入れたとして、それだけではなんにもならない。今度は鳥取県が全県で引き受けて、海だろが山だろ

うが、まくはる(均等に配る)べきだ。4、5年前に話していたメンタルヘルスの問題を国が言い始めた。今、全国で一番人口の少ない県が、山勤交代の先陣を切るというストーリーができます。

自伐林家・集落営泊の郷

今、田舎の人間は「カネにならない山なんて見たくもない」と言う。でもカネではない。ストレスの解消です。カネは山で元気になった人が稼げばいい。耕作放棄地も同じ。山も田んぼも持っているけど長男は東京、次男は大阪で百姓も山も継がないという人がいたら、山や農地を町に寄付するか安く譲っていただけませんかとお願います。500haの町有林と合わせて、都会から智頭町に来て本場に林業や農業をやりたい若者に「頑張れよ」と、無償で提供する。都会から山や農業をやりたいという若者が来ても、自分の土地がなかったらただの作業員。それでは失礼です。そして地元林業関係OBが指導者となって、自伐林業で生活できるだけのプログラムを提供する。「自伐林家の郷」構想を考えています。

ただし、都市から来た人を森林セラピーや自伐林業研修で中長期に個人の家で滞在させ月10万円もらっているとなると、ほかの家から来たものようなものも出てくる。それなら集落の空き家や学校跡地などの遊休施設を活用する集落営農なら

※労働安全衛生法が改正され、今年の12月1日から従業員数50人以上のすべての事業所にストレスチェックの実施が義務づけられる。

at プラス

24/ 思想と活動

(特集)

皇后・沖繩・イスラーム

原武史・中島岳志
國分功一郎

中田考十・橋爪大三郎

(特別寄稿) 小泉義之

皇后が支えた近代天皇制
辺野古を直感するために
イスラームとはなにか

狂気の哲学史へ向けて

(連載) 柄谷行人 いがらしみきお 大竹弘二 亀井伸幸 山崎亮 大澤真幸 佐藤優 鈴木一誌



「百人委員会」での東京から移住したひとりの女性の発案から生まれた「森のようちえん まるたんぼう」。平成21年に園児2人からスタートし、現在は28人(平成25年8人からの「森のようちえん すぎぼっくり」は現在13人)

ほとんどの人は、国、厚労省だと思っ
ていて、知事なら身近です。すったもんだ
したものの、知事がその青年に「鳥取県
大麻栽培第1号」と、ハンコを押してく
れたのです。

それが大きなニュースになって、県に
は全国から「危険なものなせ許可し
た!」とパッシングがあったようですが、
知事は「いい
じゃないか、
私に認可権が
あって、町長
が大麻で町お
こしをしたい
と言っただか
ら」と言った
とか。町にも
声が届き始め



鳥取県智頭町

人口7613人。町を囲む山林のほとん
どは杉で、「杉神社」もある(杉のま
ち)。公募した100人の町民に事業を
検討してもらい、よい提案に予算を
つける「百人委員会」。災害の際、1
日3食7日分の宿泊場所を提供する
「疎開保険」(災害がない場合は年1
回特産品を送付)で知られる

「森のようちえん」の魅力で移住

智頭町の人口は1965年に1万40
00人以上でしたが、45年後の2010
年には7700人と減り続け、昨年の日
本創成会議の予想でも「消滅可能性都
市」と位置づけられました。
人口が減っているのは事実ですが、い

っぽうで今年度の小学校の新入生は51人
でした。この子たちが生まれた年の町内
の出生数は39人だったのです。要因はさ
まざまですが、移住者が増えているのも
事実で、昨年度は21世帯。ほぼ1タイン
「森のようちえん」で子育てしたいので
移住してきたという家族が多い。森のよ
うちえんは、やはり移住者であるひとり
のお母さんの提案で6年前に始まりまし
た。決まった園舎はなく、朝、町民グラ
ウンドの駐車場に集合したらすぐに森に
出かけ、お昼をばさんで午後1時半ごろ
まではずっと森の中で過ごします。「自
然の中で学ばせたい」と、教育に対する
親の価値観も変わってきているようでし
ょう。県もこの4月から「とっとり森・里
山等自然保育認証制度」をスタートさせ、
運営費を助成するなど応援しています。
これも町の人が、今まで山として見て
いたものを森としてとらえ、森の中で子
供を育てていこうというもので、多くの
共感を得ています。そのなかには自家製
天然酵母のパン屋さんタルマーリーを経
営する渡邊格さんご一家もいて、お子さ
んを森のようちえんに通わせたいとい
うこともあって、岡山県真庭市から智頭町
に移ってこられました。渡邊さんは「田
舎のパン屋が見つけた」「腐る経済」(講
談社)を書いた人です。その渡邊さんと
ともに移住してこられたご家族も何組か
あります。

「鳥取県大麻栽培第1号」

変わったところでは、4年前に「大麻
を栽培したい」と移住してきた若者がい
ます。私も大麻をまったく知らなかった
ので、「大麻ってマリファナのこと?」
と聞いたら「そんなもんです」と言うの
で、「そんなものできるわけがない」と
思いましたが、まあ、聞いてみました。
「麻は昔は日本中で栽培されていた。と
ころがアメリカがドラッグ問題などでダ
メだとなり、日本もそれで戦後禁止され
た。それをもう一度よみがえらせたい」
と言うんですね。その思いを門前払いし
てよいのかと思いましたが、

日本も世界も、今、ものすごいスピー
ドで進化しています。昨日あったものが
今日もうなくなっていて、明日はまたつき
に行っている。「宇宙戦艦ヤマトに乗っ
てみんな宇宙に行くんだ。それに乗り
遅れる町なんてグサイ」と。しかしみな
なが宇宙に行ってもしょうがない。なか
には「私たちは高いところはいいやだ。み
んなが捨てたもの、忘れたものを拾い集
めて町づくりをしたい」と言う人たちが
いてもいい。私にもそういう部分がある
ので、不可能だとは思ったのですが、弁
護士に相談すると、「大麻栽培の認可権
は誰が持っているか知っていますか」と
聞かれます。「当然、国でしょう」と答
えると「国ではなく、知事ですよ」と。

麻に関心があると言っ
たら花屋さん。江戸時代からの技術で、
麻の茎から繊維を取ったガヤ(オガラ)
を炭にし、粉にして花薬と混ぜると、爆
発力が大きくなって、火花を大きく見せ
ることができるそうです。

今、彼は麻の6次産業化をめざして油
を採ったり、味噌に入れたり、いろん
な試作品をつくっています。タルマーリー
さんとのコラボでビールもつくる予定で
す。本物の麻で織物をしたという東京
の女性も移住してきました。機械織りの機械
を寄付したいという人や機械織りを習いた
いという女性もいます。知事との約束は、
彼を必ず企業に育て上げることです。彼
が5人でも10人でも雇用し始めたら、知
事にお礼に行きたいと思っています。(平
成27年5月1日インタビュー)



好評発売中
定価1,600円+税
ISBN 978-4-7783-1478-1

お求めはお近くの全国書店、Web書店、
ブックサービス (0120-29-9625)へ
太田出版 TEL 03-3359-6262
FAX 03-3359-0040
www.otapublishing.com/
〒160-8571 東京都新宿区発信町22 第3山田ビル4F